

■原智恵子 ピアニスト。フランスから帰国して華々しくデビューするが、音楽評論家に叩かれ続けて消され、伝説化。

はらちえこ

第一次大戦始1914＝

原敬首相暗殺1921＝ 7歳

水平社結成・1922＝ 8歳

関東大震災・1923＝ 9歳

護憲三派圧勝1924＝10歳

治安維持法・1925＝11歳

共産党事件・1928＝14歳

海軍軍縮条約1930＝16歳

満州事変・・1931＝17歳

五一五事件・1932＝18歳

国際連盟脱退1933＝19歳

帝人疑獄事件1934＝20歳

芥川直木賞始1935＝21歳

二二六事件・1936＝22歳

日中戦争始・1937＝23歳

健保＋総動員 1938＝24歳

第二次大戦始1939＝25歳

大政翼賛会・1940＝26歳

日米開戦・・1941＝27歳

・・・・・1942＝28歳

創価学会検挙1943＝29歳

年金＋総武装 1944＝30歳

敗戦・・・・1945＝31歳

新憲法公布・1946＝32歳

朝鮮戦争始・1950＝36歳

独立回復・・1951＝37歳

メデー事件・ 1952＝38歳

TV放送始・・1953＝39歳

自衛隊発足・1954＝40歳

55年体制始・1955＝41歳

国連加盟・・1956＝42歳

インスタントラーメン 1958＝44歳

美智子妃・・1959＝45歳

全国総合計画1962＝48歳

TV宇宙中継始1963＝49歳

東京オリンピック 1964＝50歳

大学紛争始・1965＝51歳

いざなぎ景気1966＝52歳

震ヶ関ドル・ 1968＝54歳

全共闘ピーク・1969＝55歳

石油ショック1973＝59歳

JALハイジャック・1977＝63歳

中曽根内閣・ 1982＝68歳

ドイツ統一 1983＝69歳

バブル始・・1986＝72歳

竹下内閣・・1987＝73歳

ドイツ統一・・1990＝76歳

金融破綻・・1997＝83歳

小泉内閣・・2001＝87歳

石川康子「原智恵子伝説のピアニスト」、

神戸須磨で、原糸太郎と久子の第四子に生まれる。父はハーバード大学に学んだエリートで川崎造船所技師長を勤め、母は琴・三味線が得意で弟子をとるという恵まれた家庭に育つ。

神戸に移住してきたスペイン人ピアニストのピラベルドに師事すると、急速に上達し暗譜も易々とする。

この年から、続々と来日するバイオリン奏者のジンバリスト、

バイオリン奏者のハイフェッツら大物演奏家が神戸を訪れると、ピラベルドに伴われて聴きに行く。

ピラベルドから娘のフランス留学を勧められた父は、まず自ら職を投げ打って一家で上京、サッシ製造会社を設立するも直ぐ倒産したため、鉄道省大臣官房研究所の技師となる一方、娘のピアノ教師を探し、インターナショナルスクールに通わせ、縁あった有島生馬に相談して音楽評論家に相手に演奏会を開く。

この年、ラジオ放送が始まる。東京のピアノ教師が自分に合わないと感じ始めるとともに、父が来日したフランス人ピアニストのマルシェックスから娘を評価され来仏を促されて、留学させることを決意、

生馬の訪欧に従い、その娘暁子とともに渡仏、マルシェックスに弟子入りするが、演奏家であっても教師でなかったため挫折、生馬の尽力で銀行家シャトネ家に預けられ、その娘のピアニストの教育で成長し始め、猩紅熱に罹るも克服し、マナーなど全般に渡る厳しい訓練を経て、その実力が開花し、

(初)の日本人として高浜虚子の次男池内友次郎が在学中の)パリ音楽院(コンセルヴァトワール)ピアノ科に入学、コルトーの後任ラザール＝レヴィに師事し、シャトネのサポートも受けて、さらに飛躍、

卒業コンクールに挑戦したが、3等だったため、再び特訓、

*遂に1等首席となり、フランス諸紙からも高い評価を受けて、卒業。自らはなお留まって成長を期し、コルトーの経済的支援の申し出もあったが、デビューを願う両親に呼び戻されて帰国。{サンデー毎日}記事、

日比谷公会堂でのデビューリサイタルで演奏の評価ができない日本人聴衆にも大きな驚きを与えた後、来日したフランスの前文相オノラの前で演奏して感激され、フランス政府の給費生となり、

後を追うように帰国した池内もリサイタルを開き絶賛される。{週刊朝日}に在仏中の日記一部掲載、

来日したルビンシュタインに挨拶した後、再び渡仏し、コルトーの助手として修業。池内も後を追うように再渡仏(結局2等止まり)。名門出ながら共産主義運動に参加して逮捕され、外国行きを条件に釈放された川添紫郎と出会い恋に陥る。

パリでデビューに成功。ベルリンオリンピック視察がてらパリを訪れた高浜虚子に池内に従い会う。

恩師レヴィの勧めで、ポーランドでの第三回ショパン国際ピアノコンクールに挑戦し、15位の結果に聴衆がブーイング、特別に聴衆賞が授与される。ワルシャワから高名なユダヤ人バイオリニスト亡命してくると、諏訪根自子を弟子入りさせる。

紫郎との結婚式のため一時帰国し、また渡仏。エリート日本人の暮らすセーヌ右岸に安川加壽子が出現、

コンサートピアニストとしてヨーロッパ各地を演奏旅行。岡本太郎らセーヌ左岸の仲間が避難帰国、

*ドイツ軍のバリ進攻を逃れて帰国。新響(N響)のソリストとなり、ローゼンストック指揮のもと協奏曲を演奏するも、夫や親族を養うべくお国のための演奏となっていく。結婚披露宴をし、長男象郎が誕生。

日比谷公会堂での安川加壽子の初リサイタルが大喝采。一回り年下のバイオリニスト辻久子を引き入れ、

政治と芸術のジレンマに悩みながら、NHKスタジオから演奏を続け、

戦艦献納音楽会で三浦環の伴奏もつとめる。次男光郎が誕生するも、夫婦間の冷却に悩む。同時期幼馴染の暁子が結婚生活に破綻し受洗。

ユダヤ人排斥でローゼンストックが離日。共演してきた三浦環に従うように、子を連れて山中湖に疎開。

戦火の中上京してNHKラジオのために演奏する一方、食糧難でやせ細っていく環のため、熱海まで買出し。敗戦直後、父が死去。仲小路家の洋館に間借りして、室内楽演奏を再開し、弟子も採り始める。GHQ指導番組希望音楽会のトップバッターに起用される。東京音楽学校も教授入替えて講師の声が掛かるも、池内が教授になったことで辞退、替わりに安川加壽子が採用される。

この年以降、NHKの新年ピアノ弾始め担当が恒例となる。三浦環が死去し、その音楽葬で葬送行進曲を献奏。夫紫郎が旧高松宮邸光輪閣支配人となり、初めて定職に就くも、芸者遊びに深入りして行くなか、自らは学校の巡回を手始めに、全国を慰問演奏して国民を励まし、カトリックの奉仕活動も行う。

母も死去して孤独となり、暁子の誘いで受洗、有島生馬のサロンで新たな刺激を受ける。発足した東京文化協会リサイタル事業のトップに起用され、なお第一人者の地位を保ったが、日本人指揮者に嫌われ、進駐軍演奏の高額報酬を嫉まれ、門下生を出さず教本出版などしなかったことから、この年のNHKキャンセル事件を契機に、孤立し始め、戦後第一号の海外演奏家として恩師レヴィが来日し安川加壽子とともに歓待したのを契機に、おとなしい加壽子と比較される形で、虚子・池内父子の意を受けた野村光一を筆頭に猛烈なパッシングが始まり、テーブルコードの国産化・LPレコード急増などで、決定的となる。

{音楽の友}に“時の人”として慰問活動ぶりが記事となる。

コルトーの初来日で再びパリへの渴望が湧き、内弟子がフランス政府給費生となり、レヴィがパリ音楽院卒業試験審査員を依頼してきたことで現実のものとなり、

*渡仏。戦前パリで親交した毎日新聞の板倉進が欧州支局長として赴任、その全面的パトロネージで吉田貴壽らと生活。安川加壽子に続き、池内も審査員招聘を画策して渡仏。夫紫郎が企画の吾妻歌舞伎欧米巡業が大成功。直ぐに帰国する安川と審査員を交替したことで、チェロの巨匠カサドと出会う一方、シャイヨー宮の演奏会でパリ楽壇に華々しくデビュー、世界的ピアニストとなり、以後、欧州各地から招聘され演奏、

帰国した板倉から譲られたライカを売って生活しながら、パリのサルガヴァー演奏会で再び大喝采を受け、大パトロンのキジ伯爵の知己も得るが、日本では音楽評論家たちが無視して報道されず、

ようやく板倉により毎日新聞夕刊の記事となった後、帰国。体調を崩しながら演奏するも冷遇は続き、

板倉が肝臓癌で急逝して孤立無援に陥った上、愛人ができた夫から離婚をほめかされ、神戸に避難、神戸女学院音楽科の教授をつとめながら再起を期すうち、

カサドとの婚約が発表され、日本に残された子は離反。高浜虚子の死に前後して、突然尾高賞審査員から除名された池内がN響を非難、以後、カサドのケルン音楽大学の授業や欧州各地での演奏に付き従う一方、家では厳しい訓練に苦しみながらも音楽の幅を広げ、遂に両者一体となった至高の演奏を実現するに至り、

カサドのアメリカ公演でピアニストとして絶賛され、来日公演。{毎日グラフ}インタビュー記事、

モスクワに招待された際のLP「デュオ・カサド」にその成果を聴くことができる。

夫カサドとともに支えられてきた大パトロンのキジ伯爵が死去、自らはスイスで子宮筋腫の手術を受け、

退院すると、再び夫と目白押しの公演旅行するが、心臓が悪化していたカサドには堪え、

スイスで保養して再開直後、サイクロンでフィレンツェの自邸が大被害を受けて落込み、カサドが死去。

深い悲しみと虚脱感でワインに溺れて行くなか、カサドコンクールに実現をめざし、

ロストロポーヴィッチとの合奏が実現。カムバックを図ろうと帰国するもはや無理。{音楽之友}で有島生馬・野村光一と鼎談。{婦人公論}にもインタビュー記事、

長男象郎が大麻使用で逮捕されるという失意のなか、イタリアに戻り、第一回カサドコンクールが実現するも、東欧情勢の反映で紛糾。以後、年末ごとに日本へ里帰り。修業を兼ねてイタリアを訪れる次男の経営するキャンティの料理長が切り盛りするパーティを楽しみ、

*野村光一「ピアニスト」が原智恵子を闇に葬り去った。

平凡社「音楽大辞典」にも脱落、

日本に里帰り中、車にはねられ、一命は取り留めるも、ピアニストの命の手に後遺症が残る。